

「想像を超える創造」を 生む特色ある地域づくり

NPO 法人グリーンバレー理事 大南 信也

地方の過疎地における一番大きな課題は、雇用がないことです。その解消に向けて、神山町ではいくつかのプロジェクトに取り組んでいます。例えば、雇用や仕事がないので移住者を呼び込めないという問題です。それなら、仕事を持った方に移住してもらうというのが、ワーク・イン・レジデンスの考え方です。また、場所を選ばない企業にサテライトオフィスを置いてもらう。さらに神山塾という職業訓練も積極的に進め、後継人材の育成を図っています。

神山町は1955年に町になりましたが、当時の人口が2万1,000人。今から3年前、国勢調査の確定値では5,300人です。比較すると約4分の1です。数値的に見ると、ほぼ絶望的な数字だと思います。

しかし、神山町は何か可能性を感じさせるというのが町の現況です。例えば東京に本社を置くITベンチャー16社がサテライトオフィスを置いています。徳島県庁、徳島大学、阿波銀行も、新たに拠点を構え、消費者庁徳島県移転の試験勤務の場にもなりました。

想像を超える創造の町を つくるきっかけは友好親善人形

徳島県出身のニッセイ基礎研究所研究理事の吉本光宏さんが、訪れるたびに予期しないことが起きているというので、神山町に対し、「上がりのない双六」という言葉を送っていただきました。その意味するところは、想像を超える創造だと思います。

1977年から2年間、私はカリフォルニア州のシリコンバレーで暮らした経験があります。1979年10月に私はカリフォルニア州から神山町に帰ってきました。そのころの神山町は何もない町でした。最初の10年間、何も起きない時期が続きました。

きっかけは、1927年にアメリカから日本に贈られてきた友好親善人形でした。当時、日米関係が非常に険悪だったので、少しでも子どもの世代から変えていこうと、アメリカから日本の子どもたちへ人形が贈られ、大歓迎されました。ところが1941年、太平洋戦争開始以後、ほとんどの人形が壊されてしまいます。そのうちの一体が私の母校の神山町小学校に残っていました。人形がパスポートを持っていて、裏側に名前とともに、出身地の欄に、「ペンシルバニア州ウィルキンズバーグ」という町の名前が書かれていました。

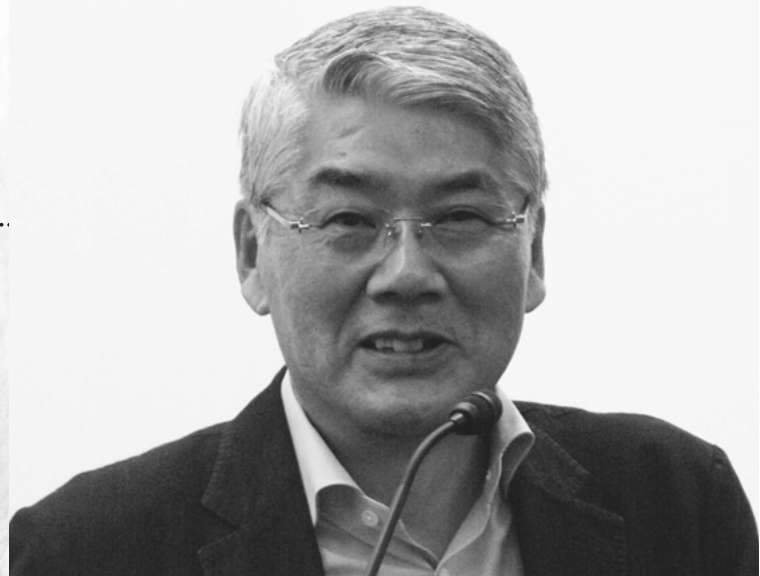
私はこの人形を誰が送ってくれたのか探し出そうと思いたち、ウィルキンズバーグの市長宛てに、送り主探しを依頼した手紙を送りました。そうすると半年後に、見つかりましたという連絡が入った。そこで、人形を里帰りさせる運動を起こしました。住民で30名の訪問団を結成し、この人形をアメリカに連れ帰ったのが、グリーンバレーのスタートです。翌年になると、この運動は神山町国際交流協会に衣替えします。転機が1997年に訪れます。

徳島県が総合計画を発表し、この中で、神山町を中心とした地域に「とくしま国際文化村」をつくるという情報が入ってきました。そこで、町に

大南 信也 (おおみなみ しんや)

略歴

1953年徳島県神山町生まれ。
米国スタンフォード大学院修了。
1990年代初頭より神山町国際交流協会を通じて「住民主導のまちづくり」を展開。1998年米国生まれの道路清掃プログラム「アドプト・ア・ハイウェイ」を全国に先駆けて実施するとともに、「神山アーティスト・イン・レジデンス」等アート関連事業を相次いで始動。2004年特定非営利活動法人グリーンバレー設立、理事長就任。2007年に始まった神山町移住交流支援センター受託運営の結果、2011年度神山町史上初となる社会動態人口増を達成。さらに2010年10月以降IT企業16社のサテライトオフィス誘致を実現する。多様な人が集う価値創造の場「せいかいのかみやま」づくりとともに、過疎化の現状を受け入れた上で、人口構成の健全化を目指す「創造的過疎」を持論に各種事業を展開している。



必要な国際文化村とはどういうものかを議論し、徳島県に提案をしていこうと動きを始めます。民間で国際文化村委員会という実行委員会をつくり、そこからいくつかのプロジェクトが巣立っていき、それらを統括運営するために、2004年にNPO法人グリーンバレーが誕生しました。

グリーンバレーでは、2つの言葉を大切にしています。1つ目は「できない理由より、できる方法を考えよう」です。2つ目は「もしその方法が見つかったら、とにかくやってみよう」です。やることによって、あぶり出されてきた問題、課題を一個一個つぶしていくと、いろいろなことが効率的に進んでいきます。

こうした発想で、「とくしま国際文化村プロジェクト」では、環境と芸術の2つの柱を立てることになります。環境については道路清掃のボランティア事業、芸術については、国際芸術家村をつくらうとアートプロジェクトをスタートさせました。

町に大きな変化を起こしてきたのは、神山アーティスト・イン・レジデンスというプログラムです。これまで20年間に24か国から、70名を超えるアーティストたちが訪れています。アーティストたちは様々な作品を残すとともに、彼らの中から移住者が生まれ始めます。

まずアーティストたちの滞在満足度を上げる

一方で神山町のプログラムは、資金が潤沢ではなく、有名な方には来てもらえないという弱点を

抱えていました。そこで発想を転換します。制作に訪れるアーティスト自身をターゲットに置きます。例えば欧米のアーティストたちから、「日本で制作するなら神山町だ」と思ってもらえるような場づくりからスタートしました。そのためには、滞在するアーティストの満足度を上げる必要があります。

神山町には、ちょうど四国八十八カ所の十二番札所、焼山寺というお寺があります。昔からお遍路さんたちが遍路道を行きかう場所です。お接待の文化が、今でも色濃く残っています。このお接待の心で、アーティストたちを寄り添うようにサポートしていきました。

このプログラムを5～6年続けてきた2005年、神山町全域に光ファイバー網が整備をされます。このころになると、神山町には自費滞滞在を希望する欧米のアーティストたちが、年間ぼつりぼつりと現れてきました。彼らに対し、宿泊やアトリエのサービスを有償提供することによって、ここからビジネスを生み出そうと、情報発信のためのウェブサイト構築にかかります。

2007年から2008年にかけて、「イン神山」というサイトをつくりました。アート関連の記事を一番よく読んでほしいと、一生懸命このコンテンツをつくり上げてきました。2008年6月にサイトを公開してみると、意外なことに一番よく読まれたのは神山の空き家情報でした。

西村佳哲さんとイギリス人のトム・ヴィンセントさんの二人にサイトづくりを手伝ってもらいました。「イン神山」の「神山で暮らす」のコー

ナーに1つ、仕組みを入れておりました。それが、ワーク・イン・レジデンスです。地域で雇用がない、仕事がないのであれば、仕事を持った人、作り出してくれる人を誘致しようという考え方です。ただし、少し絞り込みました。町の将来に必要と考えられるような働き手や起業家を、空き家を1つの武器にして「逆指名」する考え方です。町のデザインが可能になってきます。

グリーンバレーは一歩足を進め、「オフィスイン神山」という事業をやり始めます。空き家改修の事業です。二軒つながりの長屋の一角をグリーンバレーが借り受けて、一般財団法人地域活性化センターから助成金をいただいて、グリーンバレーも投資します。そして、外装、内装、水回りなどを改修しました。クリエイターがお試し滞在できる場をつくらうとしたのです。

まず、アーティストよりも少しビジネスに近い方たち。グラフィックデザイナー、映像作家、カメラマンのようなクリエイターであれば、神山町のような場所でも仕事ができるかもしれません。定住を実現するための、1つの装置としての改修です。

神山町で起こったサテライトオフィスですが、こちらは、最初からサテライトオフィスというアイデアがあり、始めたわけではありません。この改修工事のプロセスの中で、偶然人と人がつながり、結果的にサテライトオフィスを生み出していくということになります。

2010年3月と6月に、当時ニューヨークに在住していた2人の建築家、坂東幸輔さんと須磨一清さんが日本に帰国することになりました。たまたま、坂東さんが2008年10月、「イン神山」をニューヨークから見てくれました。そんなことがあって翌11月に町を訪ねてくれました。彼に空き家改修と一緒にやりませんかと提案をしたところ、ぜひということになり、一緒に取り組むことになりました。そこに、トム・ヴィンセントさんから神山町にオフィスを置きたいという一通のメールが届

きます。改修ができたオフィスはトムさんのオフィスにすることとなり、ブルーベアオフィス神山が誕生します。

一方、須磨さんの大学同期であったベンチャー企業Sansan株式会社の寺田社長が神山町に来られました。寺田社長は須磨さんから神山町の話聞き、2018年9月25日、町を訪れます。それから、20日もたたない10月14日には、Sansan（株）の社員3名が、この空き家だった建物で仕事を始めたのが、神山町におけるサテライトオフィスのスタートです。神山町にやってくる建築家、クリエイター、デザイナー、さらにはITベンチャー企業の起業家の思い、アイデアなどを住民団体であるグリーンバレーと一緒に育んだ結果、サテライトオフィスが生まれました。特に町にとって大きかったのは、若者にとって魅力的な職場が誕生したということです。神山町から誘致のための補助金は全く出ていません。全て企業側の思いや、リスクの中で入ってきてくれています。

こういう動きが、NHKのクローズアップ現代や、ニュースウォッチ9で、一枚の映像として流れます。この映像が神山町の運命を変えてしまったといっても過言ではありません。

ところで、行政などからは「できるだけ多くの人に知ってほしい」「イベントに人がきてほしい」といった思いを強く打ち出した情報が発信されていきます。しかし、それでは他と差別化されません。情報発信は、発信側の物事に対する向き合い方や哲学などをきちんと伝える必要があると思います。

縫製工場を サテライトオフィスに改装

一方、神山塾は6か月間の厚生労働省主管の職業訓練です。2010年の12月にスタートして、これまで10期170名が修了しています。そのうち、約40%が移住者として神山に残ります。さらに、そのうち20名ぐらいは、サテライトオフィスで雇用

されたり、さらにカップルが12組誕生し、赤ちゃんが8人生まれています。婚活にもなっているということで、厚生労働省注目の事業です。こういうふうには神山塾で学んだ子たちが、町の中でオーダーメイドの靴屋さんなど、小さなビジネスを始められています。

寄井商店街は、神山にあるもう一つの商店街です。灰色で塗りつぶしてあるのは、6年前までは空き屋、空き店舗だった場所です。ワーク・イン・レジデンスを活用し、オフィス、レストラン、商店などを集積していこうという事業です。だんだんと埋まっています。こうして人の流れが途絶えていた商店街に新たな人の流れが生まれてきます。

この中で、小さな地域内経済循環が起こってきます。実は、これからの地方、地域再生の一番カギになるのが、この地域内経済循環だと考えています。どうやって地域の中で、経済を循環させていくかというのが、重要になると思います。

一方で、神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス。ここは、もともと神山町所有の縫製工場でした。ここに徳島県、神山町、グリーンバレーが300万円ずつ拠出し、内側を改修して共用オフィスをつくりました。15社26名の人たちがサテライトオフィスとして利用しています。

こういう場所ができると、そこには、創造性豊かな人たちが集まり始めます。こういう人たちが集まったので、その一角にデジタル工房をつくりました。Kamiyama Makerspace（神山メーカースペース）。3Dプリンターとか、レーザーカッターなんかを置きます。そうすると、これがたちどころに、機能を発揮します。

例えば、あべさやかさんは、2013年神山アーティスト・イン・レジデンスのアムステルダムからの招待作家でした。再び神山を訪れていた2015年、レーザーカッターがこの場所に設置されるという話をすると、2016年2月に移住し、直ぐに、高等学校に入ってレーザーカッターを使ったもの

づくりを生徒たちに教え始めます。結果的に、神山町産材を使ったキーホルダーなどが開発され、これが、道の駅で販売されるという状況です。

あべさやかさんのパートナーであるアイルランド人のマヌスさんには、自分のビール工房を持ちたい夢があって、それが神山で実現します。2018年3月に、小さなマイクロブルワリーができ上がります。神山で外国人がつくったビールが飲めるような時代がやってきました。

新しいサービスが 自律的な経済発展の循環を生む

ここで神山町で起きたことをまとめてみます。1999年に、文化芸術からスタートしました。2010年からは、IT、デザイン、映像の会社がサテライトオフィスを置き始めた。こうした人の流れが生まれたことによって、これまで神山では成立しえなかったサービス業を起こした。このサービス業では当然、農産物が使われます。今は、中山間の本丸である農業に影響を与え始めています。

この農業を強化して、例えばワーク・イン・レジデンスで力を持った有機農業を集めていって、2017年3月にオーガニックフード系レストラン Food Hubがオープンしました。年間一箇所ずつくらい、有機食材を使ったレストランが神山に5年間で5つくらいオープンしたら、地域の中で農業とサービス業がぐるぐる回るような、日本では珍しい町ができ上がると思います。

通常地方で生産された農産物は中央卸売市場を経て、食材として都市圏のレストランなどに届けられます。地域に巡ってくるのは、農産物の代金です。ほとんどの地域が目指すのはブランド化です。ブランド化に成功しても、それで生まれる付加価値はたいしたことはありません。全てサービスが都市圏側で起こり、その結果雇用も都市圏側で発生してしまいます。

ブランド化を図って高く買ってもらうことも、当然重要です。しかし、こればかりに固執しては、

だめだと思います。地域内にサービスを生み出すことが重要です。地域にサービスが生まれると、農業を元気にします。農業が元気になると、景観をつくる。景観は、観光客などインバウンドなんかの観光客を呼び寄せます。この人たちがまた、このサービスを受ける。地域内で経済を循環させることが大切です。

そのためには、働き方とか働く場所の自由度を高めることによって、地方に高度な職をつくる、これが非常に重要です。今は高度な職を持つ人は、地方に住めないような状況です。だから、これを打ち破るモデルを、それぞれ皆さん方の市町村で考えていきましょう。それとともに、新たなサービスも生み出し、地域経済の循環による自律的な発展ということが、望まれると思います。

「 コアチームと ワーキンググループの役割 」

神山町地方創生総合戦略のプロジェクト名は、「町を将来世代につなぐプロジェクト」です。2015年7月から3か月間、約1回3時間の会議を20回ぐらい、重ねました。

まず考えたのは人が移り住んでいる、還ってくる、留まることを選択する背景には、地域に可能性が感じられる状況が不可欠だということです。そのためのいろいろな条件を導き出して、必要な7つの施策領域を決めていき、それぞれに必要なプロジェクトをぶら下げていったのが、神山町地方創生総合戦略です。従来のような、ある種のアライバづくりのような有識者会議ではだめだと思います。

策定メンバーをがらりと変えました。コアチームとワーキンググループを組織しました。ワーキンググループは、実動部隊。役場職員14名と住民14名、うち、移住者が6名です。この人たちは、ある意味一本釣り、アイデアを他人任せでなく、自分事として実行する人たちに集まってもらいました。この会議の中で、事務局は最初から素案を

提示しません。会議の中からプロジェクトを生み出していこうという考え方です。

一方、このコアチームは、普通の町の有識者会議に当たるものですが、神山町では町長と役場職員4名と、民間から私を含め3名入っているだけです。この有識者会議の役割は、ワーキンググループから結構とがったアイデアが出てくるだろうとの想定の中で、コアチームでお墨つきを与えていこうという考え方です。

2015年11月、ワーキンググループの中間発表会が行われました。7つの官民混成グループがそれぞれが考えたプロジェクトについて、発表を行いました。終了後、ワーキンググループに所属する人たちから次々と意見が上がり始め、最後には、「自分は役場を辞めてでも、このプロジェクトをやっていきたい」という役場職員が3名ほど現れました。誰がやるか決まったプロジェクトができると、それが即座に動いてくる。だから、全然今までと雰囲気は違ってきたわけです。

一方のコアチームはお墨つきを与えた責任があります。普通、有識者会議が終わると、解散されます。神山町では、コアチームの一員だった総務課職員、民間から加わっていた3人とともに理事となり、官民一体の一般社団法人「神山つなぐ公社」が設立されました。

神山町における地方創生総合戦略は、少なくともソフトに関しては一般社団法人が中心になって動かしていく形です。

それに加えて、役場庁舎内に課長クラスで構成される戦略会議「神山町つなぐ会議」が設置され、2週間に一度ぐらいのペースで、連絡調整しながらプロジェクトが進められています。

「 シェフ・イン・レジデンスに 世界のシェフがやってくる 」

2つほどプロジェクトを紹介したいと思います。一つは、「子育て世代向け集合住宅プロジェクト」です。子育て世代と謳っていますが、高齢者世帯、

若者のシェアハウスも、この中に含まれます。ここで目指しているのは、団地自体の高齢化を防ぐことです。経済成長時代に建てられた多くの団地で起こっている現象は、団地自体が高齢化して、同じ年齢層の人たちばかり集まっている。この集合住宅プロジェクトでは子育て世代の人たちについても、一番下の子どもが高校入学時点で退去することが入居条件となっています。強制的に世代の循環が起こる、一つの仕組みをつくってあります。

一方、真鍋太一さんは愛媛県からの移住者です。神山にサテライトオフィスを置いている「モノサス」の部長を務めています。2014年3月に移住してきた真鍋さんの夢は食を通じて人々が集い、そこに文化が生まれるような場を神山でつくりたいというものでした。それが移住3年後に実現します。神山中心部に、レストラン「かま屋」と「かまパン」がオープンしました。

神山町地方創生総合戦略の一環で、「モノサス」が主体となって、農業法人が設立されました。法人の目的は、単純にレストランの運営事業ではなく、レストランの運営を通じて、神山の農業を未来に持続させること。キーコンセプトは地産地食です。

ここでは、シェフインレジデンスと呼ばれる面白いプログラムが実施されています。冒頭でお話をしたアーティスト・イン・レジデンスの読みかえです。世界中のシェフの人がこの場所にやってきます。シェフ・イン・レジデンスの場合、提供しているのは賄いのご飯と住む場所だけです。

世界のシェフは日本の食材や料理に出会いたい。でも2~3か月、比較的安価で滞在できる場がなかったり、情報に行き当たらなかったりで、そういう場である神山に、こういう人たちが集まってくるわけです。このアーティストやシェフの部分を頭の中でいろいろ読み替えることによって、自分の町で試してみるの、結構おもしろいのでは

ないかなと思います。

さて、このように移住者たちが頑張りはじめると、地域の人たちが変わり始めます。大門さん一家は元製材業者です。元々の神山の住民が移住者の活躍を傍観するだけで、何もしないのは情けないと、一番上流部にある集落で、ブロンプトン・デポというカフェを開き、自転車のレンタル事業を始めました。1台20万円もするブロンプトンの自転車を10台くらい揃えました。すると、今では神山町内の中心部を通り越してやって来た人たちがここで自転車を借りて、神山の中心部にやってくるツアーが始まっています。

もう一人は滝上さん。ことし77歳です。この先、神山がどう変わっていくのか、見えなくなるのがつらいと話した後、でも自分にできることもあるはずだから、何でも言ってほしい。こういう人たちが現れています。こうした話を直接、間接に見聞きするのは、ここ4、5年のことです。人間の意識が変わるのは、時間がかかります。だから、早目に始めたほうが良いということでもあります。

皆さん方にも「すきな」場所があると思います。でも、「すきな」場所を「すきな」まま置いておいても、何も変わらない。「すきな」日本を「すてきな」日本に変えましょう。

案外簡単です。「すきな」日本に何を加えたら「すてきな」日本になるのでしょうか。それは「て(手)」を加え、行動を起こすことです。いい方向に行動を起こしたら、必ず「すてきな」市町村が生まれ、それが「すてきな」都道府県、ひいては「すてきな」日本をつくることになります。世の中の変化は、いきなり東京で起こるわけではなく、身の回りから起きていきます。

だから、まずは皆さん方が、その変化を主導する範を示して、皆さん方が変化を起こして、それがさざ波のように広がっていく。そして、結果的に日本をすてきに変えていくことにつながると思っています。